

## 基礎学力の分析及び教材開発

奥村 文男\*<sup>1</sup> 大佛 健一\*<sup>2</sup> 中西 義子\*<sup>3</sup> 小田野郁子\*<sup>4</sup> 桂 猛\*<sup>5</sup>  
谷口るり子\*<sup>6</sup> 岩田 正\*<sup>7</sup> 前川 昌子\*<sup>8</sup> J.スタインマン\*<sup>9</sup> 前川 武\*<sup>10</sup>

## Analysis of Basic Learning Ability and the Development of Suitable Textbooks

Fumio Okumura\*<sup>1</sup>, Kenichi Osaragi\*<sup>2</sup>, Yoshiko Nakanishi\*<sup>3</sup>, Ikuko Odano\*<sup>4</sup>,  
Takeshi Katsura\*<sup>5</sup>, Ruriko Taniguchi\*<sup>6</sup>, Tadashi Iwata\*<sup>7</sup>, Masako Maekawa\*<sup>8</sup>,  
James Steinman\*<sup>9</sup>, Takeshi Maekawa\*<sup>10</sup>

### Abstract

The authors aimed to analyze the basic learning abilities of students from the International Cultural Relations Department of the university in order to improve teaching methods and develop better textbooks.

Students were tested three times on Japanese language, English, math and specialized subjects in April 2006, July 2006 and April 2007.

The results showed that many students lack basic learning ability; in particular reading, literacy and math skills; indicating that we need not only common textbooks to teach students basic learning skills, but so set up remedial classes to improve academic competence.

---

\* 1 おくむら ふみお：大阪国際大学短期大学部教授（2007.12.21受理）

\* 2 おさらぎ けんいち：大阪国際大学短期大学部教授

\* 3 なかにし よしこ：大阪国際大学短期大学部教授

\* 4 おだの いくこ：大阪国際大学短期大学部教授

\* 5 かつら たけし：大阪国際大学短期大学部教授

\* 6 たにぐち るりこ：大阪国際大学短期大学部教授

\* 7 いわた ただし：大阪国際大学短期大学部准教授

\* 8 まえかわ まさこ：大阪国際大学短期大学部准教授

\* 9 じえいむす すたいんまん：大阪国際大学短期大学部准教授

\* 10 まえかわ たけし：大阪国際大学短期大学部准教授

キーワード

基礎学力、読解力、読み書き能力、文法、語彙、  
観光資源、流通、経営、経済常識、数学

key words

academic competence, reading, literacy, grammar, vocabulary,  
tourist resources, marketing, management, economic common sense, math

1 はじめに

国際文化学科（以下「本学科」という）に入学してくる学生の基礎学力がここ数年から低下してきていることは、授業やセミナー指導などを通じて実感としては分かっていたが、データの調査分析はなされていなかったため、今回平成18年入学の本学科の全学生を対象に、共通試験を実施し、その結果の解析を通じて、基礎学力の実態調査を行った。調査方法として、入学時の4月、前期終了時の7月、1年経過時の2回生の4月に共通試験を実施することにした。出題した問題は、全コース共通科目として国語、英語、コース専門科目として、観光・国際関連科目（観光・国際コース）、流通・経営関連科目（流通・経営コース、数的処理（情報・メディアコース）であり、観光・国際関連科目及び流通・経営関連科目は習熟度に応じた問題とした。それ以外の科目については、出来る限り同一レベル及び同一形式の問題を出題するように調整した。以下、国語、英語、観光・国際関連科目、流通・経営関連科目、数的処理の順に結果を分析してみた。

2 国語編（3コース共通）

まず、学科全体の傾向から見ていきたい（表A-1-4、A-2-4、A-3-4）。平均得点率は、第1回調査が40.7%、第2回調査が44.4%、と伸びているが、第3回調査では、逆に38.6%と落ち込んでいる。

分野別には、「長文読解」「漢字の書き取り」「言葉の理解」「ことわざの理解」の4分野について分析を行った。「長文読解」では、第1回調査では、46.4%であったが、第2回、第3回調査では、それぞれ37.6%、36.0%であり、第1回と比べると低下している。「漢字の書き取り」では、第1回調査では、18.4%と低いが、第2回、第3回調査では、それぞれ58.0%、53.5%と回復している。第1回調査の「漢字の書き取り」問題は少々難しかったと思われる。「言葉の理解」は、各回を通じて得点が低く、第1回調査では、「漢字の書き取り」の次に低く、第2第3回調査では、最も低くなっている。最後の「ことわざの理解」は、比較的得点率が高く、第3回調査の48.0%は2番目に高いが、第1回、第2回調査では、それぞれ61.6%、62.1%と最も高くなっている。これらのことから総じて言えることは、「ことわざの理解」や「漢字の書き取り」は比較的できているが（但し、第1回は低い）、文章全体の理解を問う「長文読解」は50%を切っており、言葉の正確な意味を問う「言葉の理解」も40%を割っていることより、文章全体を読み、文意を正しく判断する能力や日本語特有の言葉のニュアンスを理解できる基礎力の強化が必要と思われる。

## 基礎学力の分析及び教材開発

次に、各回の調査について分析を試みた。まず、第1回調査であるが(表A-1-1、A-1-2、A-1-3、A-1-4)、学科全体では、最高得点が77.0、最低点が15.0点と格差が大きい。特に、「長文読解」、「ことわざの理解」では満点の学生がいる一方、「長文読解」を除くすべての分野において零点の学生がおり、学生間における学力の差が大きく、基礎学力を欠く学生への学力向上の対策が求められる。これを、コース別に見ると、平均得点率は情報・メディアコースが一番高く42.4%であり、次いで観光・国際コースが41.0%、流通・経営コースは38.3%であり、また、最高点、最低点はいずれも観光・国際コースが一番高い。

第2回調査では(A-2-1、A-2-2、A-2-3、A-2-4)、学科全体では、最高点が78.0、最低点は4.0と第1回調査以上に上下の得点格差が大きい。「漢字の書き取り」、「言葉の理解」、「ことわざの理解」で満点の学生がいる一方、「長文読解」「漢字の書き取り」「言葉の理解」で零点の学生もおり、第1回調査と同様学生間の学力差が大きい。

これを、コース別に見ると、平均点は流通・経営コースが46.3%と一番高く、次いで観光・国際コースの44.9%、情報・メディアコースの41.7%となっている。最高点は観光・国際コースが78.0が一番高いが、最低点は情報・メディアコースの4.0となっており、第1回調査と比較して、流通・経営コースの得点率が向上している。

第3回調査では(A-3-1、A-3-2、A-3-3、A-3-4)、学科全体では、最高点が74.0点、最低点が2.0点であり、第1回、第2回調査と同様に、得点格差が大きい。「漢字の書き取り」「ことわざの理解」で満点の学生がいる一方、全分野で零点の学生がおり、学生間での学力差がやはり大きい。コース別に見ると、平均得点率は39.0%と観光・国際コースが一番高く、次いで情報・メディアコースの38.8%、流通・経営コースの37.6%がこれに続くが、3コース間ではあまり平均得点率では差が見られない。最高点は観光・国際コースが74.0と一番高いが、最低点も2.0があり、流通・経営の最低点は12.0となっている。

以上のことから言えることは、学科全体として、国語に関してはコース間の格差はあまりなく、学生間の基礎学力に大きな差が出ていることが注目される。また、分野別では、「長文読解」、「言葉の理解」に能力不足が見られ、こうした能力不足は授業を理解する能力、文章を作成する能力にも直接影響することであり、抜本的な改善策が求められる。

表A-1-1 第1回基礎学力調査問題(国語編)情報・メディアコース 32名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	15	20	15	100
平均得点率	49.0%	22.5%	28.8%	58.8%	42.4%
MAX	50.0	12.0	16.0	12.0	70.0
MIN	9.0	0.0	0.0	0.0	18.0

国際研究論叢

表 A-1-2 第1回基礎学力調査問題(国語編) 観光・国際コース 63名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	15	20	15	100
平均得点率	45.8%	15.9%	30.5%	64.4%	41.0%
MAX	47.0	12.0	16.0	15.0	77.0
MIN	7.0	0.0	0.0	3.0	20.0

表 A-1-3 第1回基礎学力調査問題(国語編) 流通・経営コース 32名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	15	20	15	100
平均得点率	44.9%	19.4%	20.6%	58.8%	38.3%
MAX	43.0	9.0	12.0	15.0	67.0
MIN	4.0	0.0	0.0	3.0	15.0

表 A-1-4 第1回基礎学力調査問題(国語編) 全コース 127名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	15	20	15	100
平均得点率	46.4%	18.4%	27.6%	61.6%	40.7%
MAX	50.0	12.0	16.0	15.0	77.0
MIN	4.0	0.0	0.0	0.0	15.0

表 A-2-1 第2回基礎学力調査問題(国語編) 情報・メディアコース 34名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	30.6%	63.5%	36.0%	64.4%	41.7%
MAX	38.0	10.0	15.0	20.0	70.0
MIN	0.0	2.0	0.0	2.0	4.0

基礎学力の分析及び教材開発

表 A-2-2 第2回基礎学力調査問題（国語編）観光・国際コース 63名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	39.9%	55.1%	36.9%	60.3%	44.9%
MAX	46.0	10.0	20.0	20.0	78.0
MIN	0.0	0.0	0.0	2.0	13.0

表 A-2-3 第2回基礎学力調査問題(国語編) 流通・経営コース 28名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	41.0%	57.9%	36.6%	63.2%	46.3%
MAX	46.0	10.0	20.0	20.0	73.0
MIN	0.0	0.0	0.0	6.0	24.0

表 A-2-4 第2回基礎学力調査問題(国語編) 全コース 125名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	37.6%	58.0%	36.6%	62.1%	44.4%
MAX	46.0	10.0	20.0	20.0	78.0
MIN	0.0	0.0	0.0	2.0	4.0

表 A-3-1 第3回基礎学力調査問題（国語編）情報・メディアコース 32名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	32.4%	61.3%	32.5%	49.7%	38.8%
MAX	28.0	10.0	12.0	20.0	58.0
MIN	3.0	0.0	0.0	2.0	11.0

表A-3-2 第3回基礎学力調査問題(国語編) 観光・国際コース 62名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	36.2%	57.1%	26.5%	49.7%	39.0%
MAX	34.0	10.0	16.0	20.0	74.0
MIN	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0

表A-3-3 第3回基礎学力調査問題(国語編) 流通・経営コース 30名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	39.5%	38.0%	27.3%	42.7%	37.6%
MAX	39.0	10.0	12.0	18.0	58.0
MIN	3.0	0.0	0.0	0.0	12.0

表A-3-4 第3回基礎学力調査問題(国語編) 全コース 124名

	1	2	3	4	合計
意図	長文読解	漢字の書き取り	言葉の理解	ことわざの理解	
配点	50	10	20	20	100
平均得点率	36.0%	53.5%	28.2%	48.0%	38.6%
MAX	39.0	10.0	16.0	20.0	74.0
MIN	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0

### 3 英語編(3コース共通)

まず、学科全体の傾向を見ていきたい(B-1-4、B-2-4、B-3-4)。平均得点率は第1回調査から第3回調査にかけて、それぞれ38.7%、46.7%、46.3%と総じて上昇傾向がみられ、次第に学生の習得が進んでいることが分かる。

分野別には、「語彙習得能力」「文法能力」「読解能力」の3分野に分類して検討を加えている。まず、「読解能力」については上昇傾向が見られるが、とりわけ「語彙習得能力」は、第1回調査から第3回調査にかけて、それぞれ29.9%、43.3%、60.8%と大幅に向上している。逆に、「文法能力」に関しては、それぞれ40.4%、30.2%、29.4%と低下傾向が見られる。第3回調査の平均得点率も「語彙習得能力」が60.8%、「読解能力」が50.8%であるのに対して、「文法能力」は29.4%と低くなっており、学生の英語力としては、読解はある程度出来るが、文法の理解が弱い状況にあると見られる。従って、文法を理解させ

る上での指導強化が今後必要となるように思われる。

第1回調査に関して見ると（B-1-1、B-1-2、B-1-3、B-1-4）、学科全体で得点に大きな格差が見られ、最高点は75.0点、最低点の8.0点となっている。また、上記の3分野の中ではとりわけ「文法能力」分野では最高点45.0点、最低点0.0点と得点格差も大きい。また、3分野とも無得点の学生がおり、基礎力強化の必要性を感じさせる結果となっている。

次に、コース別にみてみたい。まず、観光・国際コースについては、平均得点率が39.6%と3コースの中では2番目であったが、「文法能力」に関しては、39.0%と最も低くなっている。また、「語彙習得能力」は平均得点率30.5%と低いのが気にかかるのである。逆に、流通経営コースでは平均得点率は40.3%と3コースで最も高く、「文法能力」も43.4%と3コース中最も高くなっている。情報・メディアコースの平均得点率は35.3%で3コース中最も低くなっているが、文法能力は40.0パーセントであり、3コース中2位とある程度の力をもっているようである。

第2回調査に関しては、第1回調査ほどではないが、最高点74.0点から最低点13.0点と格差がやはり大きくなっている。また、3分野で無得点の学生がおり、基礎力が不足している状況が見られる。

コース別には、観光・国際コースは第1回調査とは逆に「文法能力」の平均得点率は29.9%と情報・メディアコースと並んで低くなっている。しかし、「語彙習得能力」は45.6%と3コース中最も高い数値となっている。流通・経営コースでは得点の格差は最高点67.0点、最低点31.0点ということでそれほど大きくはない。また、「文法能力」が平均得点率31.1%と3コース中最も高くなっている。他方「語彙習得能力」が情報・メディアコースと並んで平均得点率40.5%と低い状況である。情報・メディアコースは、最高得点68.0点から最低点13.0点と格差は大きく、「文法能力」は平均得点率30.0%と流通・経営コースと同様、低い状況である。

第3回調査に関しては、満点の学生がいた。他方、最低は12点で、やはり学科全体での格差は大きい。「語彙習得能力」は平均得点率60.8%と比較的良好な状況であるが、「文法能力」は平均得点率29.4%となっており、やはり弱いようである。

コース別には、観光・国際コースは100点の学生がいる一方、最低点は16.0点であった。「語彙習得能力」と「読解能力」はそれぞれ平均得点率が62.9%、55.6%と高いが、「文法能力」が30.8%となっている。流通・経営コースは、最高64点から最低24点と格差は比較的低いが、やはり「文法能力」の分野の平均得点率25.3%と3コースで最も低い。情報・メディアコースは、最高点84.0点から最低12.0点と格差は大きい、「語彙習得能力」の平均得点率は60.9%と、比較的良好な状況である。しかし、「文法能力」と「読解能力」はそれぞれ、平均得点率30.6パーセント、37.5%と、やはり配点の半分以下の得点率となっている。

以上のことから、今後の指導上、留意を要する点としては、英語だけではなくどの分野にも言えることではあるが、学生の実力格差が大きい現状をふまえて、授業のレベル設定をどのようにするか、また基礎力の極めて不足する学生への指導をどのように行うかが重

要な検討課題となるように思われる。読解に関しては、ある程度何が書いてあるかは分かるが、細かな文法知識や語彙力が不足しているという学生がかなりいるという状況をふまえて、根気強く地道な学習を継続することの重要性を学生に認識させる必要があるであろう。

また同時に、既に相当の力をもつ学生もいるので、そういった学生のニーズに答えることも重要であり、学生の多様なニーズに対する組織的な取り組みが必要になるものと思われる。

表B-1-1 第1回基礎学力調査問題（英語編）情報・メディアコース 32名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	30	50	20	100
平均得点率	25.9%	40.0%	37.5%	35.3%
MAX	21.0	40.0	20.0	66.0
MIN	0.0	5.0	0.0	8.0

表B-1-2 第1回基礎学力調査問題（英語編）観光・国際コース 63名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	30	50	20	100
平均得点率	30.5%	39.0%	54.8%	39.6%
MAX	18.0	45.0	20.0	75.0
MIN	0.0	0.0	0.0	11.0

表B-1-3 第1回基礎学力調査問題（英語編）流通・経営コース 32名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	30	50	20	100
平均得点率	32.8%	43.4%	43.8%	40.3%
MAX	21.0	35.0	20.0	70.0
MIN	0.0	5.0	0.0	10.0

表B-1-4 第1回基礎学力調査問題（英語編）全コース 127名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	30	50	20	100
平均得点率	29.9%	40.4%	47.6%	38.7%
MAX	21.0	20.0	20.0	75.0
MIN	0.0	0.0	0.0	8.0



基礎学力の分析及び教材開発

表B-2-1 第2回基礎学力調査問題（英語編）情報・メディアコース 34名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	30	30	100
平均得点率	41.5%	30.0%	67.6%	45.9%
MAX	32.0	18.0	30.0	68.0
MIN	6.0	3.0	0.0	13.0

表B-2-2 第2回基礎学力調査問題（英語編）観光・国際コース 63名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	30	30	100
平均得点率	45.6%	29.9%	68.3%	47.7%
MAX	32.0	18.0	30.0	74.0
MIN	0.0	0.0	0.0	16.0

表B-2-3 第2回基礎学力調査問題（英語編）流通・経営コース 28名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	30	30	100
平均得点率	40.5%	31.1%	66.1%	45.4%
MAX	32.0	18.0	30.0	67.0
MIN	0.0	3.0	15.0	31.0

表B-2-4 第2回基礎学力調査問題（英語編）全コース 125名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	30	30	100
平均得点率	43.3%	30.2%	67.6%	46.7%
MAX	32.0	18.0	30.0	74.0
MIN	0.0	0.0	0.0	13.0

表B-3-1 第3回基礎学力調査問題（英語編）情報・メディアコース 32名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	40	20	100
平均得点率	60.9%	30.6%	37.5%	44.1%
MAX	40.0	32.0	20.0	84.0
MIN	8.0	0.0	0.0	12.0

表B-3-2 第3回基礎学力調査問題（英語編）観光・国際コース 62名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	40	20	100
平均得点率	62.9%	30.8%	55.6%	48.6%
MAX	40.0	40.0	20.0	100.0
MIN	12.0	0.0	0.0	16.0

表B-3-3 第3回基礎学力調査問題（英語編）流通・経営コース 30名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	40	20	100
平均得点率	56.3%	25.3%	55.0%	43.7%
MAX	36.0	20.0	20.0	64.0
MIN	12.0	4.0	0.0	24.0

表B-3-4 第3回基礎学力調査問題（英語編）全コース 124名

	1	2	3	合計
意図	語彙習得能力	文法能力	読解能力	
配点	40	40	20	100
平均得点率	60.8%	29.4%	50.8%	46.3%
MAX	40.0	40.0	20.0	100.0
MIN	8.0	0.0	0.0	12.0

#### 4 観光・国際コース専門分野（観光・国際コース）

第1回基礎学力調査は入学間もないので、基礎的な問題を中心に出題した。以下の通りの分析結果となった（表C-1）。

常識を問う国内都道府県庁所在地は73.7%と高得点であった。国内の歴史的観光資源については、観光でよく訪れる場所は正解であったが、歴史的な観光箇所については、多く不正解が見受けられた。平均得点率62.9%であった。

主要国の首都については、さほど難解な国を避けたこともあり、比較的良くできたといえる範囲の得点であった。平均得点率64.3%であった。

国内の主要な温泉については、学生の温泉への関心度が薄いのか、29.0%という大変低い平均得点率であった。国家試験である国内旅行業務取扱管理者試験では、常に問われる事項であり、知識の向上を図れるよう授業時間をとる必要がある。

国内自然観光資源については、山に関する問題としたが、日ごろから興味が薄いせいか、正解率はかなり低くて37.5%であった。温泉同様上記資格試験に必要な分野であり、日常の勉学の必要性を感じる。

国内人文観光資源については、祭りと言物料理としたが、比較的興味があるのか、期待以上の54.0%の得点率であった。

第2回調査は前回実施より、3ヶ月経過し、前期授業終了直前に実施した(C-2)。前回実施とほぼ同じ内容の県庁所在地を問う問題と日本の地方の旧国名を問う問題の2種類としたが、旧国名は殆どの学生は、正解を得られなかった。旧国名を教える必要性を認識した。

主要国の首都については、一般的な国を避け少し専門的な答えを要求する国々の問題としたため、平均得点率は43.0%と低下した。(問題例: ブラジル、アルゼンチン、ニュージーランドなど)

国内観光資源(温泉)については、少し専門的な内容にしたので、前期勉強した割には平均得点率が低く、52.9%であった。国内の資格試験では、この程度の問題が出題されるので、授業では十分に時間を割く必要があると思われる

国内自然観光資源(川、沼、湖)、国内人文観光資源(祭り、名物料理)ともに前回と異なり、少し専門的な出題としたため、平均得点率は低下し、29.9%、26.3%になった。

国内観光資源については、温泉は勿論のこと、自然、人文と幅広い分野の知識が必要とされるので、日常生活の中でも知識を吸収できるよう、課題提出を含め授業をすすめることが大切である。今後の授業で展開する必要がある。

第3回調査は2回生講義開始早々に実施した(C-3)。

県庁所在地および国立公園についての問題を出題したが、国立公園の知識が十分でなく、平均得点率は低く51.2%であった。資格試験には、公園も必須項目であるにもかかわらず、この点の理解がなされていない。

主要国の首都については、難しい問題であるにも拘らず、高得点であった。その理由は、1回生後期に海外の授業を展開したことが要因と考えられる。平均得点率は68.8%であった。

海外主要観光地については、有名なところを省いたため、平均得点率39.6%とあまり得点は芳しくなかった。総合旅行業務取扱管理者試験の必須項目であるので幅広く勉強させる必要性を改めて認識した。

国内観光資源(神社、寺院、温泉、名所、特産品、庭園)の問題は、幅広く出題したために広範な知識が求められたが、結果は平均得点率38.1%という低い得点であった。

以上の分析結果を踏まえて現在実施している下記の講義科目を踏まえて、今後の授業展開への課題もあわせて述べてみたい。

#### 1 回生講義科目(前期)

##### 旅行業実務Ⅰ(国内旅行、J R、航空、宿泊、船の知識など)

国内観光地の知識をより向上させるため、毎回15分程度各都道府県の名産、祭り、民謡などについて記入させ、理解を深めさせる必要がある。

##### 地域と観光Ⅰ(国内に関する観光地すべての知識について)

授業時間が不足気味なので、毎回、前回講義分をテストするとともに観光地に関する課題を提出させ、知識を吸収させるなどの工夫が必要である。

旅行業特講Ⅰ（旅行に関する法律の知識）

あまり関連性が少ないが、法律の時間内ですこしでも、観光の時間をとりいれ、意欲的に取り組むよう指導し、知識の向上を図る必要がある。

旅行業特講Ⅱ（旅行に関する法律、国内観光地 JRなど国内国家資格取得のための夏季集中講義）

国内観光地に関する時間を2時間ほど増加させ、知識をまとめとして吸収できる様工夫を凝らしたい。

1 回生講義科目（後期）

旅行業実務Ⅱ（海外旅行に関するすべての知識）

首都および有名観光地について、毎回小テストを実施し、学生の理解を徹底させる必要がある。

地域と観光Ⅱ（海外に関する観光地ほかすべての知識）

過去の国家試験問題を毎回解説し、次回テストをするなど、よりいっそうの知識を習得できるよう授業をすすめる必要がある。

最後に次の点を付記して、本報告のまとめとしたい。

観光関連科目全般的に言えることは中学生時代から日本および諸外国について日頃から興味を持ち、意識して覚えるということではなく、自然に知識を身につけるといことが大切である。現在の学生は、一般的にあまりにも地理を含めて常識的な知識に乏しいといわざるを得ない。

従って、講義時間中にこれら常識とも言える事項を中心にいかに学生に理解させ、講義を効率よく進めるのが、ポイントとなるものと思われる。

講義実施にあたり、一方的に進めるのではなく、前半は講義、後半は小テストとして毎週学生が興味を持つ方法を探る必要があると思われる。学生の苦手な項目については、地域と観光の講義時間だけにたよることなく、旅行業実務Ⅰ及びⅡにおいても観光地関連の知識習得に時間をかける必要があるだろう。

少しでも多くの学生に、興味を持って観光関連の知識を習得してもらい、結果として国内旅行の国家資格を取得できる授業展開を上記の方法で考える必要がある。

表C-1 第1回基礎学力調査問題（観光・国際コース専門分野） 63名

	1-1)	1-2)	2	3	4	5	合計
意図	県庁所在地	国内の歴史的観光資源	主要国の首都	国内の主要な温泉	国内の山・峠	国内の祭りと名物料理	
配点	12.5	12.5	25.0	25.0	12.5	12.5	100
平均得点率	73.7%	62.9%	64.3%	29.0%	37.5%	54.0%	51.8%
MAX	12.5	12.5	25.0	15.0	12.5	12.5	75.0
MIN	2.5	2.5	7.5	2.5	0.0	0.0	35.0

表C-2 第2回基礎学力調査問題（観光・国際コース専門分野） 63名

	1	2	3	4	5	合計
意図	県庁所在地	主要国の首都	国内の主要な温泉	国内の川・湖沼	国内の祭り と名物料理	
配点	25	25	20	15	15	100
平均得点率	71.2%	43.0%	52.9%	29.9%	26.3%	47.6%
MAX	25.0	23.0	18.0	10.0	13.0	67.0
MIN	8.0	0.0	3.0	0.0	0.0	22.0

表C-3 第3回基礎学力調査問題（観光・国際コース専門分野） 62名

	1	2	3	4	合計
意図	県庁所在、公園	首都	海外観光地	国内観光資源	
配点	25	25	25	25	100
平均得点率	51.2%	68.8%	39.6%	38.1%	49.4%
MAX	20.0	25.0	18.0	25.0	71.0
MIN	5.0	3.0	0.0	0.0	18.0

## 5 流通・経営コース専門分野（流通・経営コース）

流通経営コースの調査結果の資料（集計結果）、表D-1、表D-2、表D-3に即して以下、検討を加えたい。

第1回基礎学力調査は入学時に実施された。内容としては、「経済基礎」分野として、「少子高齢化の進展・社会保障制度・エネルギー・食料問題・職場の意味・男女雇用機会均等法・業職種・市場の種類・インフレーションとデフレーション」など多岐にわたる分野から出題した。「流通基礎」分野については、「流通の定義・流通革命・市場価格」について出題している。表D-1にも見られるように、「経済基礎」分野では「社会保障制度・少子高齢化の進展・エネルギー・食料問題」の各分野については79%～84%と平均得点率が高くなっている。少子高齢社会や合計特殊出生率、社会保障制度における給付と負担の関係、社会保険の一元化について理解されているようである。また、石油代替エネルギーと自然エネルギーの分野や戦後の洋食化傾向と食料自給の問題も既かなりの知識を得ていると思われる。他方、「市場の種類」については25.6%と低い平均得点率となっており、売り手市場と買い手市場の意味については十分な理解がなされていない傾向が見受けられる。

「流通基礎」分野では、「市場価格」については78.1%と平均得点率が高くなっており、「流通の定義」も58.4%と大體理解しているようである。また、「インフレーションやデフレーションの意味」も56.3%とまずまずの水準となっている。流通の位置付けや目的、流通経路も大體において理解されていた。他方、「流通革命」についての平均得点率は33.3%と低くなっており、スーパーマーケットや量販店の成長と多分野に及ぼす影響につ

いて、今後理解を深めるように指導することが必要である。全体の平均得点率は、61.5%であり、分野別には「経済基礎」分野が56.6%、「流通基礎」分野は56.3%であった。

入学時点で、抜き打ちの実施にも関わらず、全体で61.5%の平均得点率が出ており、高校時代までにかかなりの勉強がなされ、習得されていたことが伺えるが、このことは事前の予想を上回るものであった。

第2回基礎学力調査は1回生前期終了時に実施された。2回目調査の内容については、「経済基礎」分野では「GDP・企業結合形態・企業と家計・貿易・石油危機」について出題し、「流通基礎」分野は「卸売・小売・物流と価格」から出題した。表D-2にみられるように、分野別平均得点率としては、「経済基礎」分野はほぼ全分野にわたって均等であるが、とくに「企業と家計」が65.4%と比較的高くなっている。企業の種類についての理解と家計に関して可処分所得や非消費支出の理解は進んでいると思われる。

「流通基礎」については、「卸売・小売」と「物流と価格」共に73.8%と高い平均得点率となっている。卸売業と小売業の機能や課題についての理解がみられた。また、物流の動向と価格決定の仕組みについての理解も見受けられる。全体の平均得点率は67.6%で、分野別にはそれぞれ、「経済基礎」が58%、「流通基礎」が74%であった。

全体の平均得点率は67.6%となっており、1回目より6ポイントの上昇であった。この結果を見る限り、前期での習得が進んでいることが伺える。

第3回基礎学力調査は2回生の前期に実施された。3回目調査の内容であるが、「経済基礎」分野では「社会保障制度・GDP・国民経済の3主体・産業分類・環境問題」の分野から出題し、「流通基礎」では「価格・PL法・クーリングオフ・ブランド・商品の種類・POSシステム」の分野から出題している。第3回の調査では第1回・第2回調査ほど細かい項目を設けてはいないが、表D-3にみられるとおり、全体の平均得点率は66.1%で、分野別には「経済基礎」が22%、「流通基礎」は44%であった。「経済基礎」分野では、全体的に出来ていないが、「産業分類・環境問題」の分野が比較的出来ており、他方、「社会保障・国民経済の3主体」の分野が出来ていない。具体的には、第1次産業から第3次産業に属する産業の理解、環境問題についてはヒートアイランド現象の問題を出題したが、何れもよく出来ていた。他方、社会保障制度の内容については、十分な理解がみられず、国民経済の担い手としての3主体についても理解出来ていない学生が多いようであった。

「流通基礎」は全体的に高得点であったが、とくに「価格・PL法」の分野は良く、オープン価格の意味や再販制度の意味についても出来ていた。また、消費者問題に関して、製造物責任法（PL法）の趣旨やクーリングオフについての設問を設けたがこれも理解出来ていたようである。一方、「ブランド・商品の種類」の分野は出来ていない傾向がみられた。ブランドの意味とマーチャンダイジングの意味、最寄り品・買回り品など商品の分類については理解が出来ていないようであった。全体の平均得点は66.1%であり、前回とほぼ同じ水準であった。

総じてみられた傾向として、流通経営分野が予想に反してある程度の得点を取っていた反面、経済基礎知識が弱い点が指摘できる。今回は、授業で習っていない経済分野からの出題が多かったのと、幅広い分野にわたっての出題であったことが、経済分野の点の低さ

に繋がったことも考えられるが、経済教育上の更なる工夫も今後必要になると思われる。

最後に今後の課題と併せて、経済・経営・流通分野の教育上の問題点を整理したい。結論的には、以下のようになると思われる。

本学科においては、多くの経済・経営・流通関連の授業科目が専門教育科目の中に配置されているが、例えば「経済のしくみ」など経済教養を身に付けさせることを授業目的とする教養色の強い、したがって実践色の薄い科目もあるため、そのような科目の場合には、受講生が講義目的、つまり学生からみれば学習目的が必ずしも明確ではなく、結果として、どうしても受講者の学習意欲（目的意識）が概して低い傾向にある。教養としての幅広い経済知識の習得に熱心な学生も散見されるが、数としては少数でしかない。このような教養に興味を示さない学生に対して、どのようにして強い学習目的意識を持たせるかが今後の重要検討課題となるであろう。

そのためにも、学科目標の明確化と時代や学生ニーズに即した継続的な学科目標見直しとともに、学科及びコースのカリキュラム構成において、とりわけ学科の専門教育科目の中での経済・経営・流通関係科目の位置付け—もちろん他の科目も含めて全体的に一をより明確化する必要がある。位置づけを明確化し、基礎から応用への科目の配置とそれぞれの位置付けを明確にした上で、学生にも講義等の位置付けをアピールしながら教育（授業）を進めることが重要であろう。当然、各科目間の繋がりは不可欠であり、必要以上の科目間の内容重複を避けると同時に、各科目の体系化による学科教育目標の実現を図ることが必要であり、そのためには教育向上へむけての「個人的（個別）取り組み」も重要だが、それ以上に「組織的（全体的）取り組み」、例えば教員研修（勉強）会・科目間連絡会・共同教育研究・教育指導相談体制の充実など方法は色々考えられると思われる。

次に、学生に目的意識をもたせるためには、資格対策の更なる導入・充実が必要になると思われる、例えば経済・経営・流通関係では簿記・販売士検定に加えて、国家資格である「ファイナンシャルプランナー技能士検定（3級）試験対策」や日本FP協会の「マネーと生活設計力検定試験対策」授業として「金融・証券のしくみ」や「家庭経済」の授業を位置付けるなどの試みが重要になるかも知れない。

本学科の学生の場合、商業高校の卒業生も多く、商業高校と普通科高校とでは高校時代の経済・流通関係の学習に大きな差がある。また、普通科高校卒業者の間でも、選択科目の幅も広がっており、経済についてあまり授業を受けていない学生も多数いる。当然、受講者の間での格差は相当大きいのが実情である。そのことは、表D-1から表D-3のMAXとMINの得点の開きにも表れている。知識格差が大きいいため、講義の水準をどこに設定するかが困難—どの科目でも起こる問題ではあるが一であるが、これが学習意欲の高揚に繋がるため、講義のレベル設定は大変重要な今後の検討課題となるであろう。

意欲の向上に関しては、経済の科目の素材として、受講生の関心の高い分野を選択する必要も有るであろう。また、教育方法としては、専門的な経済用語の丁寧な解説と反復練習が必要不可欠である。また、説明を一方向的に聞いていることの困難な学生が多いことも事実であり、この対応として作業色を強め、演習形式を採用することが必要である。また、その際のレベルも学生にやる気を起こさせるように、容易な問題、やや難しい問題、難し

い問題と段階を追っての適切な配置が重要になると思われる。

表D-1 第1回基礎学力調査(流通・経営コース専門分野) 32名

	1-1)	1-2)	2-1)	2-2)	2-3)
意図	少子高齢化の 進展	社会保障制度	エネルギー ・食問題	職場の意味	男女雇用機 会均等法
配点	10	10	8	8	8
平均得点率	79.4%	83.8%	78.9%	71.1%	72.7%
MAX	10.0	10.0	8.0	8.0	8.0
MIN	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0

	3-1)	3-2)	3-3)	4-1)	4-2)	4-3)	合計
意図	業職種	市場の種類	インフレ とデフレ	流通の定義	流通革命	市場価格	
配点	8	10	6	11	12	9	100
平均得点率	54.7%	25.6%	56.3%	58.4%	33.3%	78.1%	61.5%
MAX	6.0	10.0	6.0	11.0	12.0	9.0	81.0
MIN	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0

表D-2 第2回基礎学力調査(流通・経営コース専門分野) 28名

	1-1)	1-2)	2	3	4	合計
意図	GDP, 独占 の主要形態	企業、家計	貿易、石油 危機	卸売・小売	物流と価格	
配点	18.0	12.0	10.0	30.0	30.0	100.0
平均得点率	56.4%	65.4%	53.1%	73.8%	73.8%	67.6%
MAX	16.0	12.0	10.0	30.0	27.0	85.0
MIN	6.0	2.0	0.0	16.0	12.0	50.0

表D-3 第3回基礎学力調査(流通・経営コース専門分野) 28名

	1,2	3,4	合計
意図	経済基礎	流通基礎	
配点	40	60	100
平均得点率	55.2%	73.3%	66.1%
MAX	30.0	57.0	83.0
MIN	10.0	3.0	17.0



## 6 数学（情報・メディアコース）

数学に関しては、出題の狙いを①整数演算、②小数演算、③分数演算、④複合演算（以上、基本的演算分野）、⑤基本知識、⑥文章理解、⑦式の理解、⑧情報（以上、応用問題分野）の8分野と細かく設定し、学生の得意・不得意分野を明確にしようと試みた。

まず、3回の学力調査の分野別の得点率の推移を見ると（表E-1、E-2、E-3）、各分野ともほぼ横ばい状態であった。

次に、分野ごとの得点率を比較すると、基本的演算分野に関しては、①整数演算が90%以上、③分数演算が90%前後と高得点率を示したが、②小数演算が65%前後、④複合演算が60%前後と決して高いとはいえないことがわかった。②、④の得点率が低いのは、両者の得点率にほとんど差がないことから②小数演算が原因あると推測される。また、応用問題分野に関しては、⑤基本知識がころうじて50%前後を示したが、それ以外は、⑥文章理解が40%前後、⑦式の理解が20%～45%、⑧情報が30%前後と極端に低いことがわかった。

さらに、標準偏差によるばらつき具合を比較すると、①整数演算はほとんどばらつきがないが、それ以外はかなりばらつきがあり、⑦式の理解が最もばらつき具合が大きいことがわかった。

これらのことから、数学に関しては、授業を通じての能力の向上はほとんど見られないことがわかる。もともと数学の能力に直接つながる授業科目がないことから明らかではあるが、本来、多くの科目、例えば、表計算演習などのコンピュータ演習科目、簿記・会計関連科目、経済系科目などでは、式の理解が十分できる前提で組み立てられているため、今回の調査結果は非常に危惧するところである。

このような全体的な傾向がある中で、個人差を見るために、第1回目～3回目の得点（それぞれ100点満点）が80点以上の者、50点未満の者の人数を調べたところ、80点以上が順に5人、4人、4人、50点未満が11人、11人、11人（対象人数はそれぞれ32人、34人、34人）であった。このことは、できる者はできるが、できない者はできない、つまり、レベルの差が激しいことを表している。

したがって、学生の能力を向上させるには、能力別、習熟度別にクラス編成を行い、到達目標に差をつけるのがよいのではないと思われる。

特に能力不足が目立った応用問題とは、例えば、速度と距離の関係、食塩水の濃度、割合などを求めるもので、数学的な要素もあるが、むしろ、題意を理解する能力という側面が強い。

基本的演算能力は、繰り返し練習などである程度の能力向上は可能だとしても、理解力を向上させるというのは難しい。

今後は、これらの方策について検討していく必要がある。

表E-1 第1回基礎学力調査問題（数学編）情報・メディアコース 32名

	1-1)	1-2)	1-3)	1-4)	2-1)	2-2)	2-3)	2-4)	合計
意図	整数 演算	小数 演算	分数 演算	複合 計算	基本 知識	文章 問題	式の 理解	情報	
配点	8.0	10.0	8.0	14.0	18.0	18.0	7.0	17.0	100.0
平均得点率	95.0%	64.0%	88.8%	60.0%	53.9%	47.8%	45.7%	38.8%	57.6%
MAX	8.0	10.0	8.0	14.0	18.0	18.0	7.0	14.0	90.0
MIN	6.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0

表E-2 第2回基礎学力調査問題（数学編）情報・メディアコース 34名

	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
意図	整数 演算	小数 演算	分数 演算	複合 計算	基本 知識	文章 問題	式の 理解	情報	
配点	8	10	8	14	18	18	7	17	100.0
平均得点率	89.0%	67.1%	84.6%	62.2%	41.7%	40.2%	16.0%	29.8%	50.2%
MAX	8.0	10.0	8.0	14.0	18.0	15.0	7.0	14.0	89.0
MIN	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0

表E-3 第3回基礎学力調査問題（数学編）情報・メディアコース 34名

	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
意図	整数 演算	小数 演算	分数 演算	複合 計算	基本 知識	文章 問題	式の 理解	情報	
配点	8	10	8	14	18	18	7	17	100
平均得点率	93.8%	67.5%	91.4%	63.4%	53.6%	38.0%	23.7%	32.0%	54.0%
MAX	8.0	10.0	8.0	14.0	18.0	15.0	7.0	17.0	89.0
MIN	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0

## 7 終わりに

以上見てきたように、国語、英語、専門科目（流通・経営、観光・国際、数学）の各分析を通していえることは、学生間における学力のばらつきが目立ち、得点の低い学生は読解力とカ理解力、社会常識などの基礎的な学力が不足しているということである。その対策としては入学前教育を行うか、あるいは入学後における早期の段階で基礎学力の向上のための特別コースを設け、集中した講義を通して基礎学力の向上を図る必要がある。また、英語や専門科目（経済関係）などは出来る限り能力別のクラスを編成し、学力に応じた授業を展開することが学生の満足度を高めることにつながる。すでに高等学校である程度の学力を有する学生はより高度な授業を受けることを望むし、逆に高等学校では学ばなかった学生が大学で急に難しい話を聞いても理解できず結局勉学心の喪失につながることから、全入時代を迎えてこうしたきめの細かな大学の対応が重要なものであることを今回の

## 基礎学力の分析及び教材開発

調査分析を通して改めて確認することができた。本学科は、すでに1回生の後期及び2回生の前期において使用するセミナーの教材を一部共通化し、国語、英語、社会常識、数学などについての基礎学力の向上をはかっているが、今回の結果を踏まえて共通教材を学力に対応した内容に改訂する必要があると思われる。また、学生の総合的な基礎力の涵養のためには、学科だけの次元ではなく、例えば、共通分野の科目を担当している教員間で事前の打ち合わせや調整により、基礎から応用への授業の展開をはかることが出来るようカリキュラム上も工夫をこらし、使用する教材もそれに応じたものにするなどの全学的な取り組みが喫緊の課題であると思われる。(本報告は、平成17年度・18年度の特別研究費の教育研究助成に基づく報告である。)